クマガイコウキ監督インタビュー

今を生きる全ての人に見てもらいたい

（カトウ記）

——いつ頃から　どういう経緯でこの映画をつくろうと思ったんですか？

クマガイ（以降K）　企画はおととしの10月から。着想は…僕はいつも今できるものは何かってことから考え始めるんだけど、ちょうどその頃岸浪君（シネサラダ）の工房を訪ねた事があって、そういえば岸浪クンっていうカブリモノを造るのが得意な人がいたっけな。だったら変身ヒーローもの、それも凄くと変身するカブリモノの映画を作ったら面白いんじゃないか、そう思ったのが始まりかな。

それで具体的に岸浪君や奈良君に話したりして、マスクのデザインを頼んだりしたのが3月ぐらいじゃないかな。そのマスクがさー、仮面ライダーみたいなものだったんで岸浪クンに「それじゃあカッコよすぎるよ」っていったら「えー、時間かかるっスよー」「まぁ〜んじゃあこういうのにしてくれよ」って絵をかいて見せて「あ、これなら明日でもいい」という訳でコレになった。

クランク・インしたのが9月で予定してた7日間で撮り終わらなくて、11月に再撮影で7日間。スタッフは照明とか録音は東京から頼んで来てもらったけど、他は現地スタッフ。シネサラダの斎藤クンにも助監督をやってもらったし。

——キャストはどういうふうに選ばれたんですか？

K　三上真さんとなぎら健壮さんは脚本の段階からイメージして書きました。三上さんはもう、想像してた以上だったね。だめだよ、三上さんを『おじん』の時みたいな役で使っちゃあ。僕もファンだったから。昔の日本映画のイメージで三上さんに頼んだんだけど、ピッタリだったね。

——どんな役なんですか？

斎藤（以降S）広島弁を喋るヤクザの役。

K　特に4分の長回しの場面での三上さんの演技は圧巻だね。

ここは、こんなにうまく行くとは思わなかった。奈良君の小道具とかさ、もう絶対セットに見えないもんね。だんだん日が暮れて行くライティングとかさ。多分わかんないじゃないかな、絶対自然光だと思うと思うよ。

——橋本杳子さんは？

K　橋本さんの役はね、実は当初つかさんの劇団の平栗あゆみさんにお願いしようと思ってたんですよ。ファンだったから（笑）。でも断られた。それで色々考えたんだけど、東京に行ったとき、常本君（仙台出身で今は東京で映画監督をしている）に相談したら「橋本杳子さんはどうだ？」って、言われてコリャいける！って。それにちょっとエッチなシーンも入れられるかな、なんて思って御願いした。

——米澤牛（ぎゅう）さんは？

牛さんは、本人もつらかったと思うんだ。あの人は十月劇場っていう劇団で、10年以上やってきてる人でしょ。自分の芝居とかもうしっかり出来上がってて、それを俺は芝居するなって言うんだから。

S　でも、怒鳴り合うシーンに突然変わったことがあったじゃないですか。あれは牛さんの本領発揮という感じでしたよね。

K　あれは牛さんと木下さん（新造役）と昼めし食ってるときに話して決めたんだよ。拡声器もさスタッフ用のだったのに、これは使えるって。用をはさんで怒鳴りあうんだ。

S　それまでの牛さんの役柄と全然違うシーンなんですよね。

K　俺、ああいうそれまで積み上げて来た砂山を崩すようなことが好きなんだよねー。『立ったまま眠れ』の時も、ずっとさシリアスにきててラストに「寝耳にみみず」ってシャレを言って、そこまで積み上げてきたものを崩すていう。でも観てる人を見てると、そこまでが淡々とさてるもんだから笑っていいのかなってなるみたいね。

——ロケは殆ど仙台？

K　いや、仙台以外り郊外がほとんど。…奥仙台も仙台なんだっけ？　あと国分町とか、　榴岡公園とか…。けっこう仙台で撮ってるか（笑）。でも、ほとんどわかんないと思うよ。わかるの榴岡公園くらいでしょう。気象台とか映ってるもんね。

——ところで、エンディングの歌は熊谷さんのオリジナルだとか。

K　音楽は全部オリジナルですよ。歌も歌ってるしね。

S　プロの人と変わらなく聞こえますよね。

K　そうかぁ？（笑）最後声がはずれるっていう（笑）。「大感傷かめんー」だろ。『んー』で高くて、コリャ作るとき失敗したなって。

——いつ頃作ったんですか？

K　それこそおととし。この映画をつくろうと思った時、思い付いた。俺、映画作るとき、まずタイトルが浮かんで、その次が歌なんだよ。『大感傷仮面』は車の中で思い付いた。詞・曲いっしょなんだよ、すごいだろ（笑）。車とめてさ、適当に歌いながら、これミだな、とかソだなとかって音符書いてさ。

もともとさ、音楽も全部やりたかったから。既製のものを考えないようにしようって思って作った映画だから。そういうマイナーな方法論っていうのは8ミリ経験からひきずっているものだと思う。でもやってみて8ミリ映画と16ミリの劇場用映画は違うっていうことを実感したね。

——その違いって？

K　8ミリはさ、だって自分がカメラやって知り合いにでてくれって頼んで、俺がでれば全部自分だから。リモコンもってさー。それが今回の場合だと、役者さんにもそれぞれ付き人とかいてメイクさんもいて、スタッフも色々考えてくれるし。そういう意味では8ミリ経験は何の役にも立たなかった。また1から勉強し直しだよ。

ださぁ、それで当たり前だとおもうんだよね。8ミリには8ミリのよさがあって、それに合うやりかたってものがあると思うんだよ。たとえばさ斎藤君の『フキルム』とかはさ、これぞ8ミリ映画っていう映画だと思う。何年か前、仙台でもよくブラザートレンドとかで合同上映会とかあって、俺そういう大学の映研とかの奴らと会うのいやだったんだけど。何がイヤかって自分の映画に色々言われんのがヤなんだけどさぁ。たまに話すと「どうして8ミリで『スターウォーズ』みたいな映画がつくれないんですかねー」なんていってさ。『スターウォーズ』はハリウッドで作ってるんだからいいだろって。

S　僕も最近やっと劇場で観て好きな映画と、自分が作ってる映画は別のものだって思うようになってきましたよ。前はどうしても好きな映画をみると、こんなの作りたいって思ってたんですけど。

——自主製作の映画と商業映画は違う。

K　自主映画はアマチュアってことでしょう。でも最近の日本の商業映画もかわってきてるからね。俺、だけしの『その男凶暴につき』とかさー、大好きだけどありゃ、自主映画だよね。確かに洗練はされているけどね。だって日本映画にプロってどんどん減ってきてるでしょう。どんどん新人監督とかタレントとか作ってるけど、プロはどんどんいなくなってる。プロ不在ってことだよ。あ、わかった。それが俺の今回の映画作ったテーマなんだよ。

▼（写真左から助監督の斎藤氏（シネサラダ）、特殊造形の大学寺氏（銀座映画社）と岸浪氏（シネサラダ））

今思いついたんだけど（笑）

——じゃあ最後にこの映画をどんな人に見てもらいたいですか？

K　今を生きる全ての人に見て欲しいですね。そして、いつか岐路に立たされた時思い出して「ああ、あの映画はこんな所までよんでいたのか」と思って欲しい。どんな深読みにも耐えられるし、どんなに誤解されてもOKと思ってるから。後世の人に全く別の捕らえ方でつたえられても構わないし。そこまで読んでるから（笑）。ホントかな（笑）。